

## 第4章 東北大学の交換留学制度<sup>1)</sup>

---

これまでの章でも触れてきましたが、東北大学は文部科学省が提唱する大学の国際化事業、「国際化拠点整備事業」、「グローバル人材育成推進事業」と「スーパーグローバル大学等事業（スーパーグローバル大学創成支援）」のすべてに採択された唯一の国立大学であり、留学生の受入・日本人学生の派遣において他の国立大学を抜き出ていると言っても過言ではありません。2012年度に開始された「グローバル人材育成推進事業」において、東北大学はタイプA（全学推進型）に採択され、2013年度から柔軟で強固な「専門基礎力」に加えて、その専門能力を十分に発揮し、産学官のさまざまな分野でグローバルに活躍するために必須となる「グローバル人材としての能力」を身に付けるために、必要な知識、スキル、態度を学ぶ、『東北大学グローバルリーダー育成プログラム（TGL）』を実施してきました。本プログラムを運営する組織として、従来から留学生の受入・日本人学生の派遣を支援する国際交流センターと国際教育院に加えて、新たにグローバルラーニングセンターを設置しました。2014年4月には、これら3組織をグローバルラーニングセンターに統合し、事務部の留学生課と共同で東北大学の国際化事業の具体的な運営にあたってきました。大学の国際化を進めるうえでの本学の特徴の1つに、国立大学の中で最多の学術交流協定校数を誇っていることが挙げられます。その数は、大学間で232機関35ヶ国・地域、部局間で471機関62ヶ国・地域（2019年3月27日時点）に及びます。このことは、これから留学しようとする学生に幅広い留学先の選択肢を与え、世界からも多様な学生を受け入れることにつながっています。

本章は東北大学の交換留学の全般的な概要、留学予定者の出発前、留学中、帰国後のサポート体制を中心に説明します。その中で、2012年度

---

1) 本文の一部で、『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第2号【高橋美能（2016）「海外留学促進のためのラーニングアグリーメントの導入と課題」, pp.223-232.】に掲載された論文を引用しています。

のグローバル人材育成事業やスーパーグローバル大学等事業の一環として交換留学を促進すべく、数年かけて取り組んだ「ラーニングアグリメント」の導入についても紹介します。

## 1. 交換留学プログラムの概要

グローバルラーニングセンターと留学生課は、「大学間学術協定に基づく交換留学プログラム」の全体的な業務を担当しています。具体的には、説明会の実施、募集、選考、手続き、事前・事後研修です。募集・選考は年2回（5月と10月）で、募集開始に合わせて交換留学説明会を開催し、学生に情報提供の機会を設けています。この説明会では、交換留学から帰国した学生の報告会を同時に開催しています。毎回、留学に興味のある学生60名以上が参加します。表1に年間の募集、選考、事前・事後報告会等の実施スケジュールを紹介します。

交換留学募集要項等はグローバルラーニングセンターのホームページに掲載し、応募者は学内のオンラインシステムへの登録後、所属学部に応募書類を提出します。その後、留学生課で書類を受理し、書類審査・面接選考と続いていきます。書類審査はグローバルラーニングセンター教員が担当し、面接はグローバルラーニングセンターの他、部局の教員の協力を得て2名体制で個別面接を行っています。但し、留学アドバイジングを1度以上受けた学生は、交換留学申請時に面接が免除される可能性があります。留学アドバイジングとは、グローバルラーニングセンターの教員5名が月曜から金曜まで曜日ごとに昼休みを中心に個別留学相談（1人30分）に応じるものです。場所は1、2年生が集まる川内キャンパスのグローバルラーニングセンター教員室で行っています。募集時期の5月と10月は相談件数が多く、留学の目的や勉強計画の立て方に関する質問が寄せられます。留学先の決定や情報、奨学金、単位互換等の相談も聞かれます。その他の時期の相談は、留学の時期や私費留学を含めた留学の種類、留学の目的や留学先などに関する質問が多くなります。年間の派遣応募者・内定者数の推移は表2に示す通りです。

表1. 交換留学実施スケジュール

出発期間・ 派遣期間 月	2020年夏・秋：7月～10月 1学期～1年間	2019年冬・春：1月～4月 1学期～1年間
	2019年度1次募集	2018年度2次募集
10	募集期間 ●募集説明会	協定校への申請
11	学内審査	交換留学決定
12	●合否発表	
1		派遣開始
2	協定校への申請	
3	交換留学決定	
4		
5		●募集説明会
6		募集期間 学内審査
7		●合否発表
8	派遣開始	協定校への申請
9		
10		

表 2. 応募者数と内定者数推移

1次募集

年 度	2014	2015	2016	2017	2018	2019
申請者数	64	47	69	54	67	57
内定者数	56	44	59	49	60	56 (予定)

2次募集

年 度	2015	2016	2017	2018
申請者数	13	13	25	19
内定者数	12	13	23	18

表 2 から、2015年度の一次募集で応募者、内定者が減っていることがわかります。これは、3節で詳しく説明しますが、この年の一次募集から応募するのに必要な語学要件を厳格化し、協定校が求める語学力を満たさなければ応募できないとしたことで、一時的に応募者が減ったことによると思われます。言い換えますと、この時期を除き、応募者は年によってそれほど大きくは変化していないことがわかります。

書類・面接選考を突破して、留学が決まった学生には学内での事前研修が開始されます。

表 3. 学内研修概要

東北大学交換留学学内合格者 事前・事後報告会の概要		
	内 容	目 的
第 1 回研修	<p>【全体】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>派遣交換留学候補者としての心構え</li> <li>出発までの準備や手続き</li> <li>奨学金についての説明や留意事項</li> <li>地域担当教員の紹介(4.4で説明します。)</li> <li>東北大学のプロモーション活動の準備(留学中、協定校で開催される留学フェアに積極的に参加し、東北大学の紹介ができるように出発前に情報を収集しておく。)</li> </ul> <p>【地域に分かれて】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>受入れ留学生 / 交換留学経験者との情報交換</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大学の代表として留学先に派遣されることに対して自覚を持つ。</li> <li>出発まで留学の候補者であることを意識し、必要な手続きは自身で計画的に進める。</li> <li>出発までの学習計画を立てる。</li> <li>参加者同士のネットワークを広げる。</li> <li>留学生及び交換留学経験者との交流を通じて現地情報を収集する。</li> </ul>
第 2 回研修	<ul style="list-style-type: none"> <li>行動特性診断ワークショップ(派遣交換留学候補者は、2回目研修までに行動特性診断を受検している。)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>行動特性診断結果をもとに、留学の目標と目標達成に向けての計画を立てる。</li> </ul>

第3回研修	<b>【全体】</b> ・異文化適応、危機管理についての講演 <b>【地域に分かれて】</b> ・ポスターセッション（各自留学の目的を模造紙にまとめ、出発予定者と共有し、留学目的を明確化する。）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現地での生活準備をする。</li> <li>・出発前の不安を解消する。</li> <li>・留学中の目標を設定する。</li> </ul>
事後報告会	<b>【全体または地域別】</b> 交換留学説明会との同時開催で事後報告会を実施。留学希望者に向けて、留学先情報の提供と留学経験の発表	<ul style="list-style-type: none"> <li>・留学生生活を振り返り、留学の成果を分析し、他者に伝える。</li> </ul>

留学予定者には表3の事前研修と事後報告会の参加が義務付けられています。時間はいずれも18時30分～20時30分で、1、2年生が集まる川内キャンパスの講義室を使って研修を実施しています。事前研修は、留学の準備を促すことを目的としており、留学生や留学経験者との交流会を開催し、出発前にネットワークを広げます。事前研修3回目では、危機管理に関する講義を行った後、ポスターセッションを行って、留学予定者が留学目的をポスターにまとめて発表します。ポスターセッションを通じて、参加者が互いに留学の目的を発表・質問し合うことで、留学の目的の明確化を図ります。ここには、グローバルラーニングセンターの教員も加わり、必要に応じてアドバイスをします。出発前に留学の目標を設定しておくことで、留学中の勉学も計画的に進めることができるようになります。

帰国後の事後報告会は、自身の留学成果をこれから留学に行く学生に向けて発表するものです。帰国して間もない学生が、自身の留学経験を振り返り、留学成果を発表することで、今後の計画を立てる機会となります。また、これから留学しようとする学生が、経験者から直接話を聞き、ホームページなどでは得られない現地事情を聞くことができます。特に、経験者が困難を乗り越えた方法を聞くことは貴重です。グローバルラーニングセンターの教員も、学生の成長を確認することができます。

## 2. 全国の留学阻害要因調査

前節で交換留学の概要を説明しましたが、東北大学では交換留学生を増やすため、短期から長期につなげる工夫、学内研修の充実、協定校の

開拓などに励んでいます。一方で、留学には少なからず阻害要因があり、派遣者数の急激な伸びを期待することが難しい実情もあります。このことは、前節の表2で応募者と内定者が年によってそれほど変化していないことから確認できます。このような傾向は東北大学生に限ったことではないため、本節では日本の大学生の留学阻害要因に関わる先行調査の結果を紹介し、留学の課題を明らかにしたいと思います。

2007年に国立大学国際交流委員会留学制度の改善に関するワーキング・グループが87の国立大学にアンケート調査を行っています。ここでは、留学の阻害要因として「帰国後、留年する可能性が大きい」「経済的問題で断念する人が多い」「帰国後の単位認定が困難」が上位3位に挙げられていました(文部科学省 2014資料)。

2009年にベネッセ教育研究開発センターが実施した海外留学に関する調査では、留学経験者と未経験者それぞれに留学を決断する際の阻害要因と留学を断念した理由を尋ねています。留学経験者の阻害要因は「留学にかかる費用が高く負担が大きかった」(35.7%)、「留学に必要な語学力が不足していた」(31.3%)、「健康や治安面で海外生活に不安を感じた」(19.5%)の順、留学未経験者でも「留学にかかる費用が高く負担が大きかった」(68%)、「必要な語学力が不足していた」(39.8%)、「家庭の事情(費用負担以外の事情)」(31.6%)の順で(ベネッセ 2009年調査より)、費用や語学力の不足が共通課題に挙げられていました。

小林(2011)は、「海外留学と国際教育交流」の受講生約100名を対象に「自分の理想の留学と実現に向けた問題点」についてレポートを書かせ、経済的な理由、語学力の不足、就職活動時期との兼ね合いが3大要因に挙げられていたことを説明しています(小林 2011: 3)。

池田(2011)は、2010年に茨城大学で実施した海外留学説明会時のアンケート結果をまとめています。茨城大学では、毎年5月に開催する海外留学説明会に、例年80名程度の学生が参加します。参加者の6～7割は1年生で、留学を決めるうえで重要な要因のトップに挙げられたのが「4年間で卒業できる」ことであり、次に「交流協定校である」「奨学金がもらえる」が続いていたことが分かりました(池田 2011: 5)。また、

希望する留学先については6割以上が「英語圏」で、「次に中国、韓国」が挙げられていました。茨城大学ではアジアの協定校との研究交流が盛んなため、中国や韓国の大学への派遣人数枠が大きく、英語圏の留学枠は限られているため、学生の希望と大学の期待にギャップがあるのではないかと指摘されていました(池田 2011: 6)。

2014年9月にブリティッシュ・カウンシルが全国の16～25歳の日本人学生と卒業後間もない男女を対象に留学に関する調査を行っています。これは自己記入方式のオンラインアンケート(日本語)で、2004人から回答が得られました。そこでもやはり「留学の阻害要因として語学力の不足、費用、安全面の懸念」が挙げられていました。一方、留学を決めた理由としては、「語学力の向上」がトップに挙げられていました。また、留学経験がある学生(12%)の留学目的は、「語学力の向上」(79%)、「海外で働くため」(35%)、「友人や家族、教授に進められたから」(30%)の順、留学に関心のある学生(33%)の場合は、「語学力を向上させたい」(79%)、「海外留学がしたい」(53%)、「海外で働きたい」(47%)、「もっと自立したい」(32%)、「研究分野の単位を取りたい」(31%)の順になっていました。また希望留学先は、「米国(24%)、オーストラリア(16%)、英国(15%)、カナダ(11%)、ドイツ(7%)」と、英語圏だけで66%を占めていました(ブリティッシュ・カウンシル 2014年調査より)。

小島ら(2014)は、学生の「内向き」志向と「外向き」志向が留学にどのような影響を及ぼすのかを調査分析し、「内向群は就職活動に役立つ経験、自己の内的成長、日本人アイデンティティは留学を通して得られにくいと考える傾向にあった」(小島ほか 2014: 25-26)と述べています。また、内向きな学生は外向きな学生に比べ、留学生活への不安を挙げる傾向が見られ、「留学決定前には、適切な情報を提供することで不安を軽減させるのが有効である」と説明しています。さらに、「留学を迷っているときや留学決定後は、学生自身が抱える不安をしっかりと聞き、寄り添うことが重要」(小島ほか 2014: 26)と述べています。

太田(2014)は、留学阻害要因として海外留学を評価しない雇用者、企業がたくさんあること、要求される語学力が高度化している現実、海

外留学のための奨学金が限られていること、リスクを回避し、安全志向の学生が増えてきていること、日本というコンフォート・ゾーンへの滞留傾向があることなどを挙げています（太田 2014: 10-14）。

以上は一例ですが、留学の阻害要因や留学希望先に関する先行調査は、全国規模のものから、大学、また授業単位で実施されたものまで多岐に渡って行われてきました。その中で、留学の阻害要因として、留学の費用・語学力の不足、健康・治安面の不安、就職活動やその時期との兼ね合い、4年間での卒業の有無が挙げられています。留学先としては英語圏の人気の高いことも明らかとなっています。そして、留学促進には奨学金の充実をはじめとする金銭面での支援、4年間で卒業できる仕組みづくりと単位互換、語学習得対策が必要であり、危機管理や留学情報、相談の充実なども期待されていることが分かりました。

### 3. 東北大学生の交換留学の課題

前項の全国調査の結果を踏まえ、本節では2018年10月に実施した留学説明会において参加学生にアンケート（付録1）を取った結果を紹介しながら、東北大学生の留学の傾向と阻害要因について説明します。説明会参加者は65人でアンケートに回答した学生は46人でした。回答者の内訳を表4に示します。

表4. 回答者の学部・学年

	1年	2年	3年	4年	院2年	合計
文	6	8	1	0	1	16
経済	2	5	0	0	0	7
法	4	2	0	0	0	6
教育	3	2	0	0	0	5
工	1	3	0	1	0	5
理	1	3	0	0	0	4
農	0	2	0	0	0	2
医	1	0	0	0	0	1
合計	18	25	1	1	1	46



表4から、文学部の参加者が最多で、学年は2年生が多いことが分かります。次に、経済、法学部の学生と続き、学年では1年生が多くなっています。参加者の学年と学部により偏りが出た理由は、説明会の実施が東北大学の1、2年生と文系学部が集まる川内キャンパスで実施されたことによる可能性があります。次に、留学希望先の地域を表5に示します。

表5. 留学を希望する地域

欧 州	17
北 米	12
北 欧	9
アジア	8
オセアニア	3

表5から、欧州を希望する学生が多いことが分かります。前節の先行調査では、留学先として英語圏が人気であると述べましたが、東北大学生は非英語圏である、欧州を希望する学生が最も多くなっています。その理由は、語学要件にあると考えています。東北大学では、交換留学に応募するにあたり、語学要件を設けています。協定校が語学要件を設けている場合は、それらを満たさなければ応募できません。例えば、アメリカのカリフォルニア大学は、TOEFL-ITPでの応募を認めています。550以上の点数が求められています。この点数をクリアする学生はそれほど多くはないのが現状です。欧州の中でもイギリスへの留学にはビザを取得するのにIELTSの受験・スコアの提出が必要となるため、東北大学生にとってはネックとなっているのです。なぜなら、仙台でIELTSを受験できるのは、年に4回程度と回数に限られているからです。この機会を逃せば、東京や他の会場まで試験を受けに行かなければなりません。筆記試験と面接を考えると、2日間東京で過ごす必要があり、費用が掛かります。受験料は約2万5千円という点も学生にとって負担が大きいのです。

対して、非英語圏の協定校、欧州の大学では英語で授業が受けられる大学は、複数あります。これらの大学への留学を希望する場合、英語

での語学証明書の提出が必要となりますが、英語要件が定められていない場合が多いです。このような大学への応募は、「TOEFL-ITP500、IELTS5.5、TOEFLiBT®61のいずれかを満たす」という学内語学要件さえクリアすれば応募できます。ドイツや北欧の大学の場合、この学内条件が適用されるため、アメリカなどの英語圏ほど高い語学力を証明する必要がなく、結果的に応募者が多くなっていると考えています。次に、留学を希望する理由を表6に示します。

表6. 留学を希望する理由

語学力の向上	31
研究分野の深まり	23
異文化交流	21
異文化理解	19
国際交流	18

表6から、語学力の向上を希望する学生が多いことが分かります。交換留学は語学留学と位置付けてはいませんが、語学力の向上がトップに挙げられ、研究の深まり、交流が続いています。また、表6には挙げられていないその他として、「多様な環境に身を置きたい」「アジアの経済成長を感じたい」「難民支援の方法を学びたい」など、個々に留学の中で達成したい目標があって応募する学生もいます。次に、留学を考え始めた時期については、表7のようになりました。

表7. 留学を考え始めた時期

	1年	2年	3年	4年
入学以前	13	5	0	0
1年生の時	5	15	0	0
2年生の時	0	5	1	0
3年生の時	0	0	0	0
4年生の時	0	0	0	1
大学院に入ってから	0	0	0	0

表7から、学部の早い段階で留学を考え始めていることが分かります。それでは、どのような基準で留学先を選ぶのでしょうか。表8にアンケート結果を紹介します。

表8. 留学先を選ぶ基準 (複数回答有)

興味のある国	31
興味のある大学	13
自身の専門が学べる大学	23
時期的に適当だと思った大学	8
友人がいったことのある大学	1
知り合いがいる国/大学	1

表8から、自身が興味のある国や専門を学べる大学が選定理由の上位となることが分かります。次に、留学に対する不安については、表9のような回答が得られました。

表9. 留学の不安要素 (複数回答有)

語学力	31
金銭面	28
留学に関する情報の不足	21
留学先で取る授業/単位	16
留年	14
就職活動	13

表9の結果から、前節で阻害要因に挙げられた点と重なる要素が多いことが分かります。

それでは、このような留学への不安を解消するために、学生は大学に何を期待しているのでしょうか。この点は表10のような回答となりました。

表10. 学生が大学に期待すること (複数回答有)

奨学金	26
単位互換	26
情報提供	25
学内での語学研修	11
留学希望先の留学生の紹介	9
留学経験者の紹介	8
無回答	4

表10の結果に対して、東北大学で取り組んでいることについては、次節で説明します。

以上の調査結果から、東北大学生の傾向として、交換留学を考え始めた時期は、入学前や1年生といった早い段階であり、留学先としては欧州や北米の人気が高いことも分かりました。大学を選ぶ基準は、興味のある国や自身の専門を学べる大学が挙げられていました。留学の目的としては、語学力の向上や研究の深まりが上位に挙げられています。一方で、留学の阻害要因として、語学力、金銭面、単位互換、情報の不足などが挙げられていました。

#### **4. 留学阻害要因を克服するための取り組み**

本節では、前節で挙げられた東北大学生の留学阻害要因の中で、「金銭面、情報提供、語学力、留学のサポート体制、単位互換の問題」に対して、東北大学ではどのような解決策を講じているかを説明します。

##### **4.1. 奨学金**

金銭面については、グローバルラーニングセンターをはじめ、海外留学プログラムを実施する部局が、毎年日本学生支援機構の海外留学支援制度に応募し、留学予定者を支援する奨学金を獲得しているほか、成績優秀者の留学支援を目的とした大学独自のグローバル萩海外留学奨励賞を準備しています。また東北大学では、政府が官民協働で進める奨学金「トビタテ！留学 JAPAN」への応募を奨励しています。

##### **4.2. 情報提供**

1節で述べた学内での説明会や報告会の実施、留学アドバイジングに加えて、大学で留学経験者をグローバルキャンパスサポーター（GCS）として毎年10名程度雇用し、年間を通じて学内の国際交流活動に携わってもらっています。大学が主催する留学フェアや説明会時に自身の留学経験を後輩に伝え、協力してもらうことはもちろんのこと、GCS自身もイベントを企画・開催しています。例えば、日常的なカウンセリング

や、部活に入っている学生向けの留学説明会、留学予定者を対象とした英語ディスカッションなど、経験者自身が必要だと言う留学支援を考え、活動しています。

2018年度は、学内の留学経験者に留学成果をインタビューし、その様子をネットで配信したり、オープンキャンパス時に、東北大学生として留学の魅力をポスターにまとめて高校生に発表したり、GCS レターを作成して活動報告や留学の魅力をアピールしたりなど、様々な広報活動が行われました。

#### **4.3. 学内での語学研修**

英語力強化として、学内で課外授業として英語学習に取り組むシステム、TEA (Tohoku University English Academy) を設置しています。ここでは、学期中、また春・夏休みの間、集中して英語学習を進めることができるよう、英語ネイティブの講師による英語コースを提供しています。参加を希望する学生は、レベル分けテストを受けて、自身の英語力にあったクラスで集中的に英語を学びます。加えて、個別の英語学習カウンセリングや学内での TOEFL iBT® 実施を行っています。

#### **4.4. 留学サポート体制**

2016年10月に地域担当教員制度を導入しました。これは、4名のグローバルラーニングセンター教員が北米、欧州、北欧、アジア・オセアニアの地域担当教員として留学予定者を留学前、留学中、帰国後までサポートする体制のことです。留学予定者は表3の事前研修課題や事後報告会用の成果発表資料を地域担当教員に提出し、個別にアドバイスをもらいながら出発準備・帰国後の学習計画を立てます。留学中も、地域担当教員からメールやスカイプでアドバイスや指導を受けることができます。

#### **4.5. 単位互換の可能性**

東北大学は、学生が留年せずに留学できるように、ラーニングアグリーメントの導入に向けて具体的に取り組みました。ラーニングアグリーメ

ントとは、2010年6月文部科学省が「東アジア地域を見据えたグローバル人材育成の考え方～質の保証を伴った大学間交流推進の重要性～」の中で、「相手大学における履修科目の単位認定可否を事前に大学と学生双方が確認する仕組み」と説明しています。ラーニングアグリーメントを導入すれば、必ず卒業期の遅れが解消され、単位互換が保障されるものではありませんが、出発前に授業科目と単位互換の可能性を確認しておくことで、留学後の学習計画も立てやすく、学生にとってメリットが大きいと考えます。ただ、単位互換については、グローバルラーニングセンターと留学生課だけで解決できる問題ではなく、大学全体で取り組むべき課題です。そのため、東北大学では次のような形で進めていきました。

### 1) 状況調査のためのアンケート実施

まずは、学内での留学と単位互換の関係を把握するため、2013年12月、学内の10部局（文、教育、法、経済、理、医、歯、薬、工、農学部）に対して交換留学の単位互換に関するアンケート調査を実施しました。歯学部を除く、全部局から単位互換制度を持っているとの回答を得ました。工学部の機械知能・航空工学科からは、事前確認システムを導入し、教務委員が積極的に学生をサポートしながら事前確認作業を行っているとの回答を得ました。

### 2-1) 情報交換会の実施（1回目）

2013年5月、全部局の国際関係担当者を対象に、情報交換会を実施しました。そこでは工学部の機械知能・航空工学科でラーニングアグリーメントを導入するに至った経緯と手続きについて事例を紹介してもらいました。参加者は40人を越え、活発な意見交換の場となりました。また、多くの部局の教職員から、留学促進に、単位互換の可能性を広げることが重要との意見が出され、ラーニングアグリーメントがその解決の第一歩になりうることを確認されました。この情報交換会后、グローバルラーニングセンターと留学生課の教職員は、学則などを確認しながら、ラー

ニングアグリーメントの様式とガイドラインの案を作成しました（ラーニングアグリーメントの様式については、付録2を参照）。

## 2-2) 情報交換会の実施（2回目）

2014年10月、国際関係担当の教職員による2回目の情報交換会を実施しました。ここでは、「留学相談時の対応」をテーマに、グローバルラーニングセンターの教員が日頃行っている留学アドバイジングを、教員と学生に分かれてロールプレイする形でデモンストレーションしました。その後、各部局での相談事例の紹介や質疑応答の時間を設けました。この時はテーマが「留学相談時の対応」であったにもかかわらず、多くの部局から、留学を勧めるうえで単位互換の問題が課題であるとの意見が出され、ここでもラーニングアグリーメントの導入の必要性を確認する機会となりました。

## 3) 短期派遣実施委員会での検討

2015年9月、全学の部局の教員が集まり、派遣について議論・決定する短期派遣実施委員会において、留学阻害要因や学内での「ラーニングアグリーメント」の導入の必要性を検討しました。審議の結果、グローバルラーニングセンターと留学生課、そして3部局（文、工、経済学部）の短期派遣実施委員会の委員（教員）と教務で構成するラーニングアグリーメントのワーキング・グループを立ち上げることが決定され、導入にあたって部局が直面する課題について具体的に検討することとなりました。

## 4) ワーキング・グループでの議論

2015年10月、1回目のワーキング・グループを開催して、3部局の現状と課題について意見交換しました。ここでは、日ごろ部局が抱えているさまざまな課題が出されました。例えば、留学先の大学の情報が限られていることです。この点に関して、別の部局から単位互換の実績を閲覧できる報告書を残しておく有効であるとの事例が紹介され、参加者

間で参考になる情報として共有されました。そして、この時に出された課題と解決策を基に、ガイドラインの修正版を作成することになりました。同年11月に2回目のワーキング・グループを開催し、ガイドラインについても意見交換を行いました。

## 5) 学内の教務との意見交換会

4)のワーキング・グループでの意見が固まった段階で、2015年12月、グローバルラーニングセンターと留学生課は、全部局の教務・国際部門の事務部の担当者を対象に、(1)単位認定・互換の方法、(2)単位数の換算方法、(3)成績の付け方について意見交換を行いました。ここには、12部局(文、教育、法、経済、理、医、薬、工、農学部、国際文化、情報科学、生命科学研究科)の教務担当者22名が集まりました。その中で、多くの部局から事後の単位互換の申請は受け付けていても、事前に確認する仕組みはまだ検討されていないことが報告されました。また、成績の読み替え方法や単位換算方法は、部局によって異なることが分かりました。このような機会を設けて、他部局と情報共有することは有意義でしたが、ラーニングアグリーメントの導入には、多くの課題が残されていることも明らかとなりました。

出された課題を基に、各学部で抱えている課題や成績の付け方をガイドラインの中に事例として追記し、短期派遣実施委員会の審議を経て、教育国際交流運営委員会に諮りました。そして2017年8月に学務審議会で審議され、全学で参考にする資料として、グローバルラーニングセンターが主体的に作成したフォーマットを全部局に紹介する形で通知することが決定されました(付録2)。しかし、以下のような課題も残されています。

## 6) 学内での情報交換・共有

本項の冒頭でも述べましたが、ラーニングアグリーメントの導入は、国際交流を担当する一部局だけでは実現できず、部局の協力が必要となる点です。そのため、導入に向けてまずは各部局の状況を把握する必要



があり、学内での情報交換が必須となります。先述の通り、2013年と2014年の情報交換会では部局の課題として単位互換の問題が挙げられ、ラーニングアグリーメントの必要性が確認されました。同時に、医学部・歯学部のように、国家試験を受ける関係で、海外では履修できない科目があり、1学期以上の留学が難しい実情が明らかになりました。このような場合、春休みや夏休みの短期プログラムへの参加を勧めるなどの方策を考える必要があります。

このように、ラーニングアグリーメント導入のためのワーキング・グループを作って教職員が各部局の課題を意見交換する機会を設けたことで、グローバルラーニングセンターや留学生課では把握できなかった単位互換の実情を聞くことができました。導入後も、部局と連携を図りながら、ラーニングアグリーメントの導入に向けて体制づくりを行っていくことが必要不可欠であることが示唆されました。

## 7) 学生への情報提供

本学の国際交流支援室を設けている部局では、教職員が常駐し、留学経験者の単位互換に関する資料も閲覧できる場所もあります。しかし、全部局でこのような支援室を設けているわけではなく、設けていても、どのような授業があるのかを情報収集する方法が限られているとの課題は残されています。この点でも、留学経験者を活用する、また各大学の協定校が一挙に集まる国際会議、世界の大学が一挙に集まり、留学生のモビリティについて意見交換する場 (NAFSA、EAIE、APAIE など) を利用して、常に学術交流協定校とコンタクトを取り、最新情報を入手し、学生に提供していく必要があります。「単位互換できる授業」の情報を提供する学部では、事前の計画書をスムーズに留学中に変更できる仕組みを作ることも課題です。同様に、本学のシラバスをホームページで掲載し、留学生が本学で学ぶ科目を事前に確認できるような情報公開の必要性も示唆されています。部局によっては、現地に行かなければ具体的な学習計画が立てられないところもあり、カリキュラム制度の根本的な相違などを含めて、今後の大きな課題となっています。

以上の課題に加えて、ラーニングアグリーメントは法的拘束力のない、学生と教務担当者との契約書のやり取りであり、帰国後の申請書の提出を持って、必ず互換されると保障するものではありません。例え学習計画を立てて、承認を得ても、実際の単位互換は帰国後の部局の判断に委ねられることとなります。課題は残されていますが、ラーニングアグリーメントを導入することで、学生が単位互換の可能性を事前に確認できるというメリットだけでなく、学生の留学の目標が明確化され、学習計画を立ててから出発することが可能となり、留学の成果の最大化にもつながります。また、大学にとっても、学生の留学の状況を把握できるようになります。

## 5. おわりに

本章では、東北大学の「大学間学術協定に基づく交換留学プログラム」について説明し、東北大学生の留学阻害要因、そして阻害要因を克服するために東北大学で行っているさまざまな取り組みを紹介しました。

大学で交換留学の促進を図る一方で、留学に興味のない学生が多いことも分かっています。東北大学学生生活調査(2017年度)では、約6割の学生が「留学に興味がない」と答えています。筆者は2016年度に留学未経験者76名にアンケート、および4名にインタビューを行って、留学に踏み切れない理由を聞きました(高橋 2017)。その結果、自身の優先すべきものが他にあり、留学に興味はあってもそれとのバランスを考えて留学に踏み切れない様子が聞かれました。また、留学するのなら万全な準備をしたいと考えている学生がいることや、自ら情報収集するだけの意欲がなかったとの声も聞かれました。実際、留学を断念したことで希望の就職先が決まり、満足している様子も見られました。この時の調査では、学生一人ひとりの価値観はさまざまで、留学の重みも異なっているため、まずは留学に興味のある学生への支援強化と留学の成果を伝える方法を充実させることが重要ではないかが示唆されました。ただ、インタビューに応じた学生の中には、当初自ら情報収集するほどには留学に興味はなかったものの、インタビューを通じて留学について

考え、相談することができ、目指す留学の方向性が明確になったことで意欲を高めた学生もいました。このことを通じて、大学の留学支援の在り方を見直す必要性も示唆されました。今後も大学全体で留学の情報提供に努めるとともに、何らかの理由で留学を断念せざるを得ない学生には、その解決策を検討し、対策を講じていく必要があると考えています。

以上に加えて、留学を促進するために、次のような方策があります。

1つは、入学後すぐの学部1年生に夏のスタディ・アブロード・プログラム（以下、SAP）の参加を勧め、早い段階で留学経験をすることで、在学中の交換留学応募を促すことです。本章で紹介した表7から、留学を考え始めた時期が入学前や1年生の頃との回答が多いことが分かりました。このような学生の留学をサポートする意味でも、入学後1年生に東北大学の留学について全体像を説明し、早いうちに短期留学に挑戦し、交換留学につながるような働きかけが必要ではないでしょうか。

2つは、SAP参加者に事前研修1回目と事後研修で交換留学の応募条件や時期について説明し、興味のある学生に留学アドバイジングを受けるよう働きかけることです。実際に交換留学の応募者の半数以上がSAP経験者であり、短期から長期への留学につながっています。SAP参加者に交換留学の情報を伝え、応募を促すことで交換留学への応募者が増加するのではないのでしょうか。

3つは、SAPのプログラムの中でTOEFL iBT®やIELTSの受験を盛り込むことです。実際にイギリスのヨーク大学でのSAPには、IELTSの受験が含まれています。現地で4週間英語学習に取り組み、最終週に英語力の伸びを確認するため、IELTSを受験します。これまでの参加者で、プログラム中に取得したスコアで帰国後すぐに交換留学に応募し、イギリス留学を実現した学生がいます。本文でも述べましたが、仙台でIELTSを受験できる機会は限られており、受験料が高いこともあり、IELTSの受験がイギリス留学のハードルになっています。そのため、現地で語学試験のノウハウを学び、学習成果の確認のため、現地で試験を受けてスコアを持って帰ってくることで、短期から長期につなげることができるのではないのでしょうか。

以上は、現在考えている方法の一例ですが、今後も阻害要因の把握と解決策に取り組み、留学に興味のある学生が確実に留学を実現できるようなサポートを行っていきたいと考えています。

## 参考文献

- 池田庸子(2011)「海外留学の意義とメリットを考える－海外留学によって何が得られるか－」, ウェブマガジン『留学交流』Vol.4, pp.1-10.
- 太田浩(2014)「日本人学生の内向き志向に関する一考察－既存のデータによる国際志向性再考－」, ウェブマガジン『留学交流』Vol.40, pp.1-19.
- 小島奈々恵、内野悌司、磯部典子他(2014)「日本人大学生の海外留学に関する意識調査－『内向き志向』と留学意思の関係－」, 『広島大学保健管理センター研究論文集』, 30巻, pp.21-26.
- 小林明(2011)「日本人学生の海外留学阻害要因と今後の対策」, ウェブマガジン『留学交流』Vol.2, pp.1-17.
- 高橋美能(2018)「日本人学生の海外留学を促進する方策－東北大学の留学相談者と留学未経験者を対象とする調査結果を基に－」, 『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』, 第4号, pp.373-381.
- 高橋美能(2016)「海外留学促進のためのラーニングアグリメントの導入と課題」, 『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』, 第2号, pp.223-232.
- 東北大学ホームページ(2017)「平成29年度東北大学学生生活調査のまとめ」,  
<https://www.tohoku.ac.jp/japanese/studentinfo/studentlife/09/studentlife0901/> (閲覧2018/12/4).
- ベネッセ教育総合研究所(2012)「第3章海外留学」, 『大学データブック2012』,  
[http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/dai\\_databook/2012/pdf/data\\_06.pdf](http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/dai_databook/2012/pdf/data_06.pdf). (閲覧2017/1/18).
- ブリティッシュ・カウンシル(2010)「ブリティッシュ・カウンシルの

留学に関する調査概要と結果」.

<https://www.britishcouncil.jp/about/press/20111114-mobility-research>. (閲覧2017/1/18).

文部科学省 (2009) 「大学の国際化について」,

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/025/gijiroku/\\_icsFiles/afieldfile/2010/01/15/1287996\\_1.pdf#search=%27%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E3%81%AE%E5%9B%BD%E9%9A%9B%E5%8C%96%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6%EF%BC%8D%E6%96%87%E9%83%A8%E7%A7%91%E5%AD%A6%E7%9C%81%27](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/025/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2010/01/15/1287996_1.pdf#search=%27%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E3%81%AE%E5%9B%BD%E9%9A%9B%E5%8C%96%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6%EF%BC%8D%E6%96%87%E9%83%A8%E7%A7%91%E5%AD%A6%E7%9C%81%27). (閲覧2017/1/18).